

**巻頭言**

## 啐啄「Obesity と Metabolic Syndrome」

京都大学大学院医学研究科内科学講座  
臨床病態医科学・内分泌代謝内科学

中尾 一和

「肥満研究」の巻頭で、あえてObesityとMetabolic Syndromeの因果関係を含めた点に言及しようとは思わない。内分泌代謝学領域より肥満症の研究に参加しているPhysician-Scientistとして、肥満研究者に「啐啄」の認識の必要性を指摘したく思います。

北米内分泌学会の2003年のテーマは「Cardiovascular Endocrinology」であり、2004年は「Obesity」に決まりました。「Cardiovascular Endocrinology」のtargetはMetabolic Syndromeであることはいうまでもないことですが、米国糖尿病学会(ADA)でもMetabolic Syndromeが闊歩している現状です。そして2004年は「Obesity」そのものが北米内分泌学会のテーマに決まりました。北米内分泌学会に「先見の明」があるのでなく、時代の要請と考えるべきでしょう。

日本肥満学会の学術委員会を春日理事、矢田理事とともに担当するものとして、日本肥満学会の全会員の皆さんに「啐啄」の認識を持って各々の持ち場で行動を開始することを希望します。2003年7月より「医師主導の臨床試験(治験)」が承認されましたが、Translational Medicineにおいても日本肥満学会関係者の活動を積極的に支援していく体制を整える準備に入ります。科学的で公平な学会の支援は強力な武器になるはずで。

アディポサイトカイン、摂食調節因子、11-β-HSD1、GPR40(脂肪酸受容体)など多くの研究の糸口が見つかっています。また臨床面では、本年4月より包括診療の病名に「肥満症」が加えられたことは、疑いなく記念すべき第一歩といえるでしょう。抗肥満薬の開発も一層拍車が掛かることになると思われます。

昨年、私達がお世話をして京都で開催された日本肥満学会における「松澤理事長提言」通りの順風に心身をひきしめて一層の肥満研究の発展を期待しています。